

氏名・(本籍地) 名和界子(山形県)  
学位の種類 博士(人間学)  
学位記の番号 乙第92号  
学位授与の日付 令和元年9月25日  
学位論文題目 成人期自閉症スペクトラム障害者のアタッチメントについて  
論文審査委員 主査 森岡由紀子  
副査 内山登紀夫  
副査 柴田康順  
副査 小川俊樹

名和界子氏 学位請求論文審査報告書

「成人自閉症スペクトラム障害者のアタッチメントについて」

論文の内容の要旨(1200字以上)

近年、青年期や成人期になってから診断される自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD と略記)は、本来の症候の他に、環境への不適応などを誘因とする二次的な精神医学的問題や合併症を有することが多いと報告されている(Attwood, 1997, 2006; Tantam, 1998; 宮川, 2011, 2012; 齊藤, 2009, 2014)。支援者側は、ASD 者の自己概念、対人関係に着目することが重要となる。これまで成人期 ASD 者のアタッチメントについて明確になっていることは少ない。本研究の目的は、成人期 ASD 者のアタッチメントの特徴を検討することである。

<研究 1>

目的: 自閉スペクトラム傾向(以下 AS 傾向と略記)とアタッチメントの関連をについて、把握する。

対象: 首都圏の大学生 200 人に質問紙を配布し 151 部回収し(回収率 75.5%), 128 人分を分析対象とした。調査協力者に対し、研究目的、方法、研究参加の自由性、データ類の取り扱いについて説明し、協力の同意を得てから無記名で調査を行った。大正大学倫理委員会の承認を得た。

手続き: (1) 成人用自閉症スペクトラム指数日本語版(Autism-Spectrum Quotient; 以下, AQ と略記)(若林・東條, 2004): 定型発達者を含む自閉症スペクトラム傾向を測定する尺度として信頼性および妥当性が確認されている(北添ら, 2009)。

(2) 一般他者版親密な対人関係尺度(the Experiences in Close Relationships inventory for the Generalized Other; 以下 ECR-GO と略記)(中尾・加藤, 2004): 親密性の回避(12 項目)、見捨てられ不安(18 項目)の 2 次元で構成されている。

結果: 被験者を AQ 得点により AQ 高群(上位 25%), 中群, 低群(下位 25%)に分類した。ECR-GO の各尺度平均値を基準として、被験者をアタッチメントスタイルごとに安定型、不安型、拒絶・回避型、恐れ・回避型と分類した。AQ 得点とアタッチメントスタイルの関連を検討するために、AQ 中群を除いて  $\chi^2$  乗検定を行なったところ、有意傾向が示された( $\chi^2(3, N=64)=7.084, p<.069$ )。残差分析の結果、AQ 低群では安定型の人数が、高群では恐れ・回避型の人数が多かった。

考察: AS 傾向は、恐れ・回避型のアタッチメントと関連すると考えられた。ASD 児のアタッチメントについての先行研究と一致していた。

<研究 2>

目的: 成人 ASD 者のアタッチメントと対象関係について検討する。

対象: ASD 者 10 名(男性 6 名, 女性 4 名)。大正大学倫理委員会の承認を得た。調査協力者に対し、説明文書・調査参加承諾書を提示し、研究目的、方法、参加への自由性、診療情報の

参照, データの取り扱いについて, 文書による同意を得た。

手続き: (1) 一般他者版親密な対人関係尺度(the Experiences in Close Relationships inventory for the Generalized Other; 以下 ECR-GO と略記)(中尾・加藤, 2004)。

(2) アタッチメントに関する半構造化面接: 脅威場面における対人行動の有無, 頻度, 他者への接近の仕方や情緒的反応を尋ねた。所要時間は 30~50 分であった。

(3) ロールシャッハ・テスト(以下, Ror.テと略記): 施行・評価は片口法に準拠した。

結果: (1) ECR-GO と半構造化面接によるアタッチメント分類: 他者を拒絶しているという感覚がなく他者との親密さがわからない 5 名を「不接近型」と筆者が命名した。他者に接近する際に恐れを感じている 5 名を「恐れ・回避型」とした。

(3) Ror.テ: 「不接近型」と「恐れ・回避型」の変数を比較検討した。

①統計的分析: 各変数について Mann-Whitney の U 検定を行った。「恐れ・回避型」は、「不接近型」よりも, 人間運動反応 M ( $U=22.50, p<.035$ ) が有意に多かった。

②その他: 「不接近型」に個人的経験の引用, 反射反応, 立体反応が見られた。

考察: 「不接近型」は, 内的活動が不活発で対人関係の質的な部分を感じ取ることができないため, 情緒的なアタッチメントを形成しにくく, 他者と距離を取る傾向が強いと考えられた。

「恐れ・回避型」は「不接近型」よりも, 内的活動が活発で他者と情緒的交流をすることが多く, 協働的な他者との関係を望んでいるが, 迫害的な不安を抱きやすいため対人関係における葛藤が大きいと考えられた。

### <研究 3>

目的: ASD 特性の理解と, 対人関係上の工夫を開発すること, 自己理解を促進することを目的とした心理教育を行い, その効果を検討する。

対象: 研究 2 の協力者の中から 4 名 (男性 1 名, 女性 3 名) である。調査協力者に対し, 説明文書・調査参加承諾書を提示し, 研究目的, 方法, 参加への自由性, 診療情報参照, データの取り扱いについて, 文書による同意を得た。

手続き(1)心理面接: 先行研究を参考に新たに作成した資料をもとに心理教育を行った。(2)自己理解質問(Damon & Hart, 1988): 自己の様々な側面に及ぶ複数の質問を行うことで自己理解の内容を捉えるものである。心理面接前後に質問を行った。

結果と考察: 心理面接前後の自己理解質問への回答を比較したところ, 4 事例とも肯定でき言及が増加していた。セラピストに対する情緒をアセスメントし, 心理面接に活用することが重要であると考えられた。

### <総合考察>

AS 傾向と恐れ回避型のアタッチメントは関連していた。また, 臨床群の ASD 者の一部は従来のアタッチメント類型に当てはまらないことが明らかになった。ASD 者のアタッチメントには, 情緒的応答ができる心の部分が大きな影響を持ち, 早期の対象関係が非常に重要であると推察された。今後はサンプル数を重ね ASD 者のアタッチメントについて縦断的に検討する必要があると考えられた。

## 審査結果の要旨（1200字以上）

本論文は、近年注目されている成人期になって診断される自閉症スペクトラム障害者のアタッチメントを検討・分析することを目的としている。本テーマはこれまで本邦では検討されることがほとんどなく、審査員からは「非常に重要な視点であり、論文の観点や最終的な結論は興味深いものである」という総意と評価を得た。

研究1は予備的研究として実施され、一般大学生を対象として自閉症スペクトラム傾向(AS傾向)とアタッチメントについて検討し、AS傾向は恐れ・回避型のアタッチメントと関連していることを検証した。

臨床例を対象とした研究2では、質問紙と投影法(Ror.テ)の結果から、アタッチメントを内的活動が不活発で対人関係の質的な部分を感じ取ることができないため、情緒的なアタッチメントを形成しにくく他者と距離を取ることが強いと考えられる「不接近型」と、内的活動が活発で他者と情緒的交流をすることが多く、共同的な他者との関係を望んでいるが迫害的な不安を抱きやすいため対人関係における葛藤が大きいと考えられる「恐れ・回避型」(Ror.テでは、human運動反応の多さと質の悪さが認められた)という2タイプがあることを明らかにした。この結果は、成人期自閉症スペクトラム領域での今後の研究に大きな影響を与えると予想される。「不接近型」(この命名もユニークであると評価された)すなわち、他者との距離を取っているアタッチメントスタイルを持っている方が適応がよいという結論にも本研究の新知見があり、この点をさらに深めて検討する必要があるという指摘があった。

また研究3での結果から、今後はそれぞれのアタッチメントにあった心理教育プログラムの開発、特に「不接近型」の特徴を活かした対人スタイルを強調したプログラムを作る必要があるのではないかというコメントがあった。これらは今後の課題であろう。

分析方法についての指摘として、研究1でAQ得点をもとに3群に分けているが、高群(25%)と低群(25%)の分析であるため、AQ中群をいれて分散分析を行った方がよいのではないかということ、自閉症スペクトラム障害者のグループ分けの基準について一部明記されていない手続きがあること、変数比較については統計的な手法だけではなく統計にとられない質的論考があってもよいということが審査では指摘された。また質問紙の選択について「一般他者版親密な対人関係尺度(AQ得点が算出される)」を用いているが、この尺度は定型発達者の対人関係を測定するためのものであるため、自閉症スペクトラム者の特徴に合致しているかについての検討が必要だろうという指摘があった。このことについては名和氏から、自閉症スペクトラム者の対人関係に合わない質問項目が多くあり、考察で触れる必要があったと回答された。審査員からの質問に対しての氏の応答は適切なものであった。

著書として出版される際には、指摘されたことを検討して加筆されることを期待している。

名和氏は臨床心理士となった早い時期から、ボーダーラインパーソナリティ障害と診断を受けている人や、抗うつ剤に反応せず抑うつが遷延している人の中に、発達障害をベースとして持っている人々がいることを提起していた。また、成人のアタッチメント評価については、アタッチメントスタイル・インタビュー(ASI)のトレーニングとスーパービジョンを受けるという経験を蓄積した上で、本研究デザインと実践がなされていて、実際の精神科医療現場に多くのことを還元できる研究成果が得られたと考える。

以上のことから本研究は、大正大学の博士論文として十分にふさわしいものと結論する。

### 公表予定

日程	2019年9月 下旬
公表形態	①掲載誌名：【                      】【                      】号・巻 【                      】頁 【全文・要約】
	②単著（発行者）名和 界子
題目	<※タイトルを変更した場合>